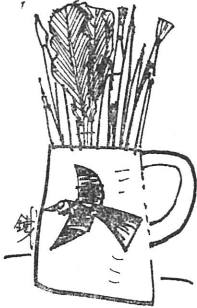


あるクロマツ林の運命 一下

—皇居外苑今昔物語—



大 政 正 隆

(元宇都宮大学学長)

日比谷濠，馬場先濠に面した土手の内側が土という名のもとに，世にも不思議な物体で埋められている，と前号で述べたが，図一1の土手裏面の新しい盛り土がそれである。その盛り土の厚さが，なんと，40cmから2mにもおよんでいるのである。

盛り土の事業は戦後に行われた，といわれている。図一5の日比谷濠に面した土手裏の，たしか土壤調査地点2付近だったと思うが，その辺の盛り土はいわゆる青粘土だった。青粘土は水にどっぷりと漬かってできた土で，空気不足のために鉄が還元されて青色になり，それが影響して青系統の色をしている土である。粘質で，物理的にも化学的にも性質がきわめて悪く，植物が満足に育つような土ではない。そんな，正常な土とはいえない代物が，盛られていたのである。

聞くところによると，霞ヶ関の官庁街をつくったときに，現在農林省のある合同庁舎などを建設する際に地下から掘り出された青粘土だということである。

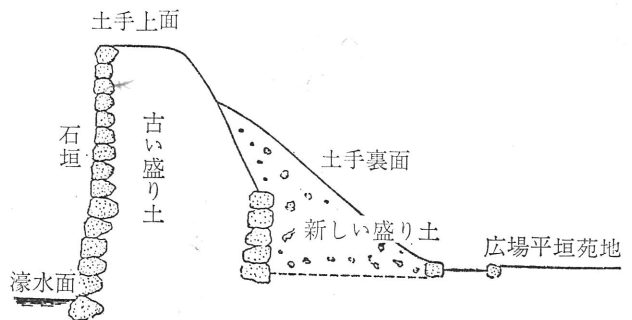
埋め立てられた範囲は，黒鳥氏の記録によると，おおよそ日比谷口から馬場先口までの間，となっている。盛り土の厚さは30~35cmだった。

この地域にはクロマツのほかに，カシ類，クスノキ，シイノキ，エノキなどが植えられていた。その根が土手裏の盛り土をする前の旧斜面やその下方の平坦面に伸びていた。その根の上には青粘土が盛られたのであるから，たまったも

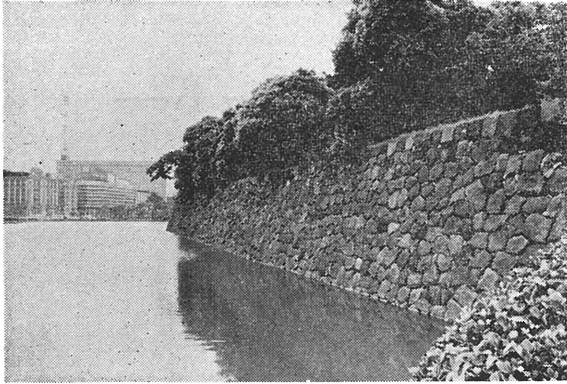
のではない。調査当時すでに，旧表土中を走っていた中根の大部分と細根のほぼ全部は死滅し，クロマツ，シラカシ，シイノキなどは相当衰弱していた。その後枯れ木はとりのぞかれ，土地改良工事も行われたので，現在では昔日の惨憺たる面影はなく，見る人に安らかな気分を与えるが，しかし，日比谷濠の南北に長く延びた部分の土手の上から水面に臨んで枝を伸ばしていた見事なクロマツの姿などは，もはや見るができない。昔を知る人には，寂寥の感に耐えぬものがあるであろう。(写真一.2)

馬場先口から和田倉口におよぶ土手裏の盛り土(前号図一1参照)は青粘土ではなかった。その代わりに，レンガ，コンクリート塊，瓦礫などを多量に含む廃材土とでもよんだらよいような代物であった。和田倉口近くだったと思うが，おそらく路面から剥ぎとったのであろう，アスファルト

図一5 皇居前苑地土手裏の盛り土



(黒鳥忠氏の報文から引用)



写真一 日比谷濠に枝を垂らしていたクロマツ
はいまは見るできない。



写真二 枝を垂らした貧弱なクロマツ、水面で
なく道路に臨んでいる。

様の物まで埋められているのを目撃して驚いた記憶がある。

このような仕打ちをうけた植物こそ災難である。土手裏下縁部の老エノキの並木は、2m前後の盛り土によって死んでいった。土手の上にあった由緒ある老エノキも土手裏の急斜面を這っていた根が40cmから80cmもの廢材土の下となって死に、木そのものも、調査時には幹の一部や太い枝が枯れて、大いに衰弱していた。そのエノキも今は亡い。

こうして外苑の木という木は、大気汚染のためもあったろうが、土のはなはだしい悪条件によって、衰弱の一途をたどっていたのである。

こうなると病害や虫害が心配になる。調べると案の定、主としてクロマツに、マツクイムシ、カイガラムシ、マツカレハなどによる虫害、スズ病、ハフルイ病などの病害が発生していた。

以上のような事実を前にして、私どもはいくつかの対策を樹てた。

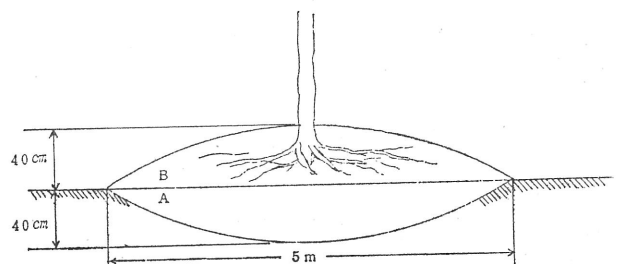
それを提出するまえに、最も費用のかからぬ方法として、クロマツを廃して、広葉樹しかも大気汚染に抵抗力の強い樹種に代えることが考えられるが、そうした案が取りあげられるかどうかを、打診してみた。というのは、クロマツのような根が好氣的のものは、上述の土壤条件では生育がおぼつかない。それに前号でちょっと触れたように、外苑の土は有楽町貝層で代表される貝殻を多数含む堆積物が母材となってい

るから、石灰が多くて土壤が弱酸性ないし微アルカリ性である。これでは、かなり強い酸性の地を好むクロマツの生育には全く不適である。そのうえクロマツは、大気汚染に対して抵抗力が非常に強いというわけではない。それに上述の不良の土を、広葉樹だったら改良するかもわからぬ、という一縷の望もあって、樹種の交代を話に出したが、一蹴された。皇居外苑はやはりマツでなければならぬ、というのである。

クロマツを主体とした美しい外苑をつくるにはどうしたらよいか。私どもは次のような提案をした。

(1) 枯れた木はもちろん、衰弱がひどくて回復の見こみのない木は取り除いて新植をする。ところどころに見られる空地には補植をする。新植又は補植をする場合には、図一6のような穴を掘ってその部分の土を取りのぞき、良質な土を客土す

図一6 新植（補植）のための客土



(皇居外苑樹木調査一中間報告Iから引用)

る。その場合円丘状に中央を高くする（図中Bの部分）。それは、排水を良くして根の発達を促すためである。図に示した穴の寸法は、経費を考慮したうえでの最小限のものである。

苑地全体が本当の土といえるものではないのであるから、全地域の樹木に対して、根をなるべく傷めないように幹の周囲の土を良質のものに代える。また、耕耘、施肥などの土壌改良を行う。

苑地改良のためには、私どもはもちろん、新植（補植）時の客土同様に具体的方策を示した。その方策は林業試験場の前土じょう部長塘隆男氏が樹てたものである。

(2) 樹林団地への立ち入りを全面的に禁止する。

(3) 病虫害防除の手当をする。

(4) 大気汚染の軽減をはかるとなると、これは東京都全体として考えねばならぬことで、外苑管理の責任者だけではどうにもならない。ただ浮遊塵埃の害を軽減することはできる。なにしろクロマツの葉を束にして水の中で筆を洗うように洗うと黒い汁がでたのであるから、黒い汁として洗い出された塵埃が気孔をふさいで植物を害することが十分に考えられる。

浮遊塵埃の発生を防ぐために道路に撒水し、塵埃除去のために葉を洗う。

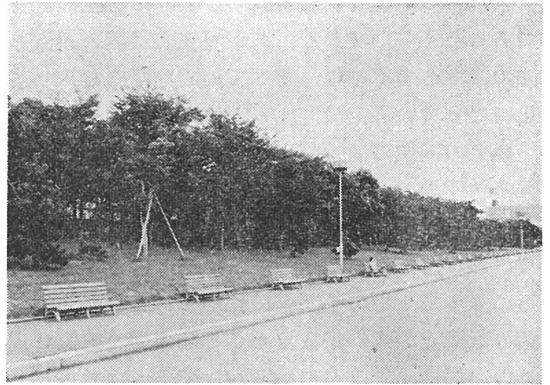
このほか、できれば自動車特にトラックの苑内乗り入れを制限する。

細かいことはいろいろあったが、提案の大意は、上記のようなものであった。

以上の提案に対してどのような反応があったで



写真—4 新植された広葉樹。



写真—3 土手裏には木が茂っている。

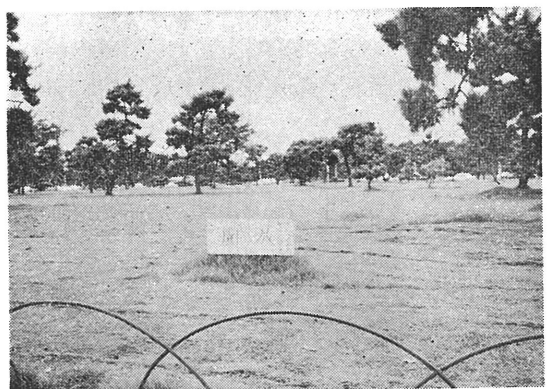
あろうか。

土のとり変えを含めての土地改良は苑地全面にわたって行われた。土手裏の盛り土面でも行われた。だから盛り土面にも、現在では木が茂っている。（写真—3参照）全苑にわたって肥料は今でも施用しているとのことである。

新植、補植は相当進んでいる。クロマツは目通り周囲60cmから75cmぐらいのものが植えられているそうである。

やはりそうだったか、と思わずもほほえんだのは、祝田通りから西の樹林団地は依然としてクロマツにするが、東の団地は逐次広葉樹林に変える方針で、クスノキ、タブ、ヤマモモなどが植えられているということである。（写真—4参照）

樹林団地への立ち入り禁止案は当初物議をかもした。都民の自由を束縛するという非難の声に応



写真—5 開放区、午前8時から午後6時まで開放されている。

えて、ある放送局から委員のひとりに難詰の電話があったくらいである。だが現在では楠公銅像を囲む団地をのぞいて、すべての団地は立ち入り禁止になっている。

楠公の銅像は前号図一1の日比谷濠に近い平坦部樹林団地の中央やや下方の円形の広場（土壤調査地点3の右下）の中央に四角の印であらわされているが、これを囲む団地は、図でみるように歩道によって4つの小団地に仕切られている。この辺りは観光の人の集まる場所なので、芝生が荒れない程度に、4つの小団地は交互に立ち入りが許されているのである。（写真一5参照）

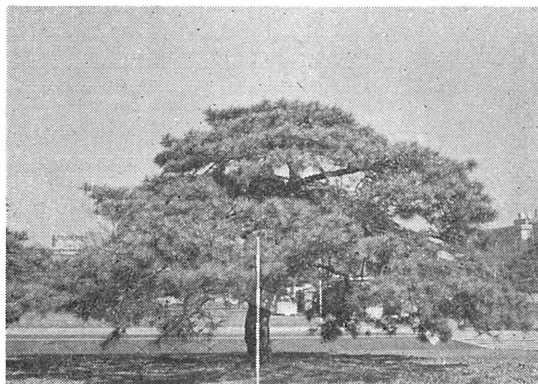
病虫害防除については、毎年薬剤が散布されているそうである。薬まきも行われているようで、虫や病気の被害は今のところ、聞かれない。

大気汚染の軽減であるが、調査当時に比して東京都の空気は大幅綺麗になった。道路への撒水は行われているであろうし、もしそうでなくても浮塵は昔ほどは舞いあがらないであろう。葉の洗滌は現在も行われていないそうだけれども、以前よりは葉面は綺麗になったのではあるまいか。

こんなわけで外苑の木々は、クロマツをはじめとしてすっかり生きかえた。クロマツの回復ぶりを写真一6と写真一7で比較してみたい。

これまでお話をした事情を知らない人たちが、皇居外苑のマツの勢が最近非常によくなった、生き生きとしている、と話すのを聞いたときに、私は、何ともいえぬ幸福感にひたるのである。

この話は昭和37～8年のころのことであるか



写真一6 昔のクロマツ（昭和38年頃撮影）

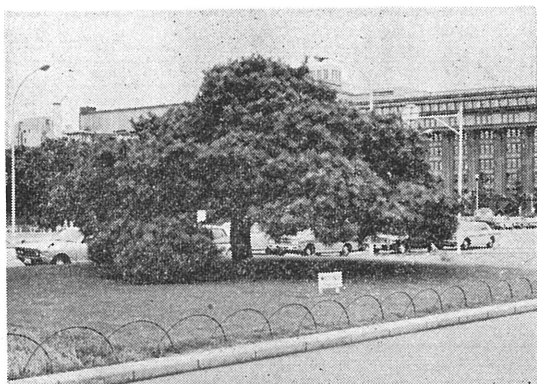
ら、十数年も昔の物語ということになる。それを今さら持ち出したのには、理由がある。これは私ひとりの考え方もかもしれないが、今まで述べた事柄のなかに、きわめて斬新な問題がひそんでいると思われるからである。その2、3を思いつくままに述べてみよう。

異物を地下に埋めて処理するという事は、今にはじまったものではない。だが近頃は、それではなほだしい。ごみ処理の問題で紛争を招いた東京都の夢の島のように、土地造成に異物が大量に使われるようになった。その際「土」の必要性がどこまで考えられているであろうか。ほかのことはさしおき、本誌の読者の関心の的の緑化についても、「土」はどのように考えられているであろうか。

以前は土のことなどは、ほとんど考えなかったようであるが、過去の失敗に懲りて、異物の上におく土の厚さも、最近増加してきたようである。しかしまだ、その土の下になる物体の性質が上の土の性質を変えることには、あまり思いおよばないようである。外苑の場合がよい例で、深いところに緊密な層があれば、水の影響が上においた土におよぶのである。

異物を埋めなくても、山を削って平地をつくった場合とか海岸や沼沢を干拓した場合に平地や干拓地はそのままでは、本当の意味で「土」といえたものではない。そのうえに土をおいても、異物の上に土をおいたのと同様の現象がおり、場合によっては木は育たぬ。緑化は不可能である。

これからも土地造成がつぎつぎと行われるであ



写真一7 現在のクロマツ（昭和52年撮影）

ろうが、皇居外苑の例を噛みしめ、地下深くまでの性質を十分に考慮して、慎重なうえにも慎重な措置をとってもらいたいものである。

外苑の平坦部を芝生でおおうために15~20cmの盛り土をしたことが、クロマツにとって好ましくなかったと前号で書いたが、根が地表近くを這う場合には、地表に土を盛ることはきわめて有害である。木は衰弱するばかりか、時には死んでしまうのである。

富士山の北側につくられたスバルラインによるシラベ（シラビソ）林の破壊がそのよい例である。道路開設による森林の破壊が喧伝された当時、道路の建設によって森林が伐採されると急に林内に風や光がはいるようになり、森林の生物社会の均衡がくずれること、森林が乾燥したり風倒木が発生することなどが、理由として唱えられた。そういうことはもちろんある。ところが最も大きな被害は、道路建設の際に道から斜面の下方に投げ棄てられた土砂によって地表がおおわれて引きおこされたことが、後になってわかった。

赤外カラー空中写真を撮ると樹勢が衰えたり枯死した木がはっきりとわかる。そこでスバルラインを中心に赤外カラー空中写真をとると、写真にあらわれた枯死木・衰弱木の分布区域と土砂の堆積区域とが、ぴたりと一致したのである。

こうした事実が判明した今日では山に道路をつくるときには腐土を山麓に運んで斜面の下方に棄てないようになった。一進歩というべきである。

外苑の事例が示すように、木の衰弱がただひとつの原因でおこるということは、少ないのである。いろいろな原因が重なっておこる場合が多い。だから単純に原因はこう、と決めつけずに、観点を変えて調べる必要がある。

ことに注意しなければならないのは、病虫害である。木が衰弱すると、必ずといってよいほど、病害や虫害があらわれる。

おそろしいのは、病菌や害虫の多くが伝播性をもっていることである。人々はこの事実あまり注意を払わない。都市に住む人たちが、ことにそうである。

先般来マツノザイセンチュウ（以下ザイセンチ

ューと書く）の論議が巷間を賑わしている。交わされている論議の中に、どうせマツは大気汚染で死ぬのだから、今さらザイセンチュウの害を防ぐ必要はない、ザイセンチュウを運ぶマツノマガラカミキリを駆除するなどはもってのほか、という説までまかりとおり、またそれが、多数の支持を得ているのである。大気汚染で死ぬのは汚染された地区にあるヤツだけだが、ザイセンチュウとなるとそうはいかない。放っておけば、他所にどんどんひろがるのである。運が悪ければ、日本のマツの大半が死滅しないとはかぎらない。

伝播のおそろしさは、人間の場合だと、すぐ理解できても、樹木や森林となると、それがいかに国土保全に必要であろうと、貴重な資源であろうと、またわが国の風致に欠けからざるものであっても、そう簡単には理解できないのである。和歌山県有田市のコレラ騒ぎのときなどは、家にはクレゾール、道には石灰、葉とがふんだんに撒かれても、誰ひとり苦情をいわないばかりか、警戒解除の日が早すぎた、という非難の声さえあがった。これに対してマツの虫害などになると、その何万分の一の注意もはられない。当然だといえればそれまでだが、しかし悲しくも不思議な話ではあるまいか。

その昔島崎藤村が魚に関する随筆で、声なきものは悲し、と書いたのを讀んだことがあるが、虫害に苦しんだり、おびえたりしているマツたちもさぞかし、声なきものは悲し、と嘆いていることだろう。

その声であるが、日本人はまことに素直にひたすら声を大にするときがある。外苑の樹林団地への立ち入り禁止の際にあがった声などは、まさにそれである。ザイセンチュウ防除反対の声もこれに近いものがある。どうもわれわれ日本人は、こうした声で、右に左に揺り動かされながら仕事を進める運命にあるようだ。あるいはこれがかえって、ことを慎重に運ぶ結果をもたらすのかもしれない。

思えば皇居外苑のクロマツは、われわれに数々の貴重な教訓を垂れたものである。（完）